

《図書紹介》

下程勇吉 編『教育人間学研究』
下程勇吉 編『日本の近代化と人間形成』

北 川 治 男
奥 村 寛

下程勇吉編『教育人間学研究』

(法律文化社、昭和57年、666頁、10,000円)

京都大学名誉教授、下程勇吉博士は、戦後いち早く、京都大学教育学部にわが国で唯一の教育人間学講座を創設し、「日本における教育人間学の樹立という、画期的な金文字塔を建てられた」(はしがき)方である。本書は、下程博士の喜寿記念論集として企画されたものであるが、博士が、「私自身の記念論集というよりも」「本邦最初の企画として」の「教育人間学研究論集」(あとがき)を出版したいということで、世に送られたものである。

本書には、34名の執筆者が独自の研究業績を寄せているが、第1部は教育人間学の各分野の体系的研究論文(21篇)が、第2部は代表的思想家の人間観(13篇)が収められている。ここでは、序章として位置づけられた、西ド

イツのロイトリンゲン教育大学教授、フリードリッヒ・キュンメル の論文と、終章を飾る、元チュービンゲン大学教授、オットー・フリードリッヒ・ボルノーの論文を紹介したい。

1

まずキュンメルの「将来の教育人間学の指針としての現実性の範疇」について述べよう。教育人間学は、人間についての科学的経験的な洞察や哲学的思弁的な洞察に満足するものではなく、生きた現実存在としての「人間の本質的全体的構造、ならびに一切の人間活動の意味賦与根源」(665ページ)を究明しようとするものである。そこでキュンメルは、教育人間学の研究の発端について、次のように述べている。「教育人間学は、認識の源泉として、直接的な交流関係(やりとり)を避けることができない。」(4ページ)また「われわれは、はじめから人間の現実性から出発せねばならない。」(7ページ)

この現実性は、代理不可能な個人によって、今、ここにおいて、生きられるものである。人間は、誰も、自己自身の現実性と結びついている実在感を、他者に伝達することができない。その意味で、何人も自己自身の現実性の主体であり、この現実性は「個別的な範疇」(10ページ)なのである。

キュンメルはまた、人間の本質にかなった教育は、「必然的に、現実性への教育となる」(11ページ)という。その教育は子供の時から始まるが、子供にとって母親は「最初の世界」(12ページ)となり、母親との信頼あるいは不信、拒否あるいは親愛の関係が、子供の現実性の特性や感情的な色調を規定する。子供のその後の世界との関わりも、それに左右されるのである。

この現実性への教育は、子供が置かれた社会的個人的状況がもつ矛盾を避けて通ることができない。それどころか、この「矛盾との交流(つきあい)こそは、現実性への教育の核心点となる」(14ページ)のである。現実性は、「すでに子供にとってさえも、はっきりと、いろいろの勢力の争い合う世界として姿を現わすのであって、子供は其中で生きることを学ばねばな

らない。」(15ページ)われわれは、矛盾をしめ出した教育観から出発することはできないのである。

しかし現実性の否定的契機は肯定的契機と分かちがたく結びついている。現実性の厳しさは、子供がそれにふさわしい仕方で反応する準備ができている限り、それ自体として子供の人格を損うものではない。子供は「嬰兒的現実性要求からますます解き放され、不確実なものの中へ踏みこんで行く勇氣」(16ページ)をもたなければならない。また「子供は、自己の環境の中へ成長して入りこんでゆくことができねばならないし、同時に、その環境と対決して自己自身へ帰えるように命じられている」(17ページ)のである。

現実性の否定的契機は、肯定的契機とバランスを保っている限り、促進的・生産的にはたらく。したがって現実性の大地を踏みしめている者だけが、現実の矛盾を乗り越えていくことができる。言い換えれば「前もって逞しくされた自我だけが、自己自身を放下する心構えができる」(17ページ)のである。

そこで、むしろ大人自身が、現実の矛盾や相対立する価値に対して、いかに対処しうるかということが、問われてくるのである。大人の方が、「かちかちに杓子定規式に固まっけて、善悪の価値対立に釘付けに」(16ページ)なるのではなく、現実の矛盾はすべて、一方で「倒錯や停滞の可能性」(16ページ)を孕むとともに、他方では「積極的充実や発展の可能性」(16ページ)を胚胎していることを、二者択一的にではなく「複眼的」(16ページ)に受けとめていくことが要請されるのである。

キュンメルの教育人間学的洞察によれば、「窮極的には、人間はあらゆる人生の霜雪という遭遇経験によって常にくりかえし自分自身にかえり、彼の行為と苦難の歴史を心胸の歴史として学びとる」(18ページ)のである。

2

次にボルノーの「沈黙一人間学的考察一」について、その要点をいくつか

の引用を混えながら紹介しよう。この論文を織り成す珠玉の文章は、要約を拒む豊かさをもっているからである。

まずボルノーのいう「沈黙」とは「そこから一切の語ることが出てくるとともに、そこへまた一切の語ることが帰って行く根底」(665ページ)を意味する。このように沈黙とは、語ることとの関係で成立するものであるが、それは、単に「語られないこと」ではない。沈黙が意味をもつのは、人が語ることが期待され、語ることがふさわしい場合だけである。したがって「沈黙はまさに語ることによって浮き彫りにされる「語られないこと」であって、その限り、積極的に性格付けられる現象である」(655ページ)といえる。

言い換えれば、沈黙は「対話の中に入り込んで来る休止」(661ページ)であるが、その休止は、決して空虚なものではなく充実したものである。つまりその「休止は語ったことについての反省で充され、さらに語られるべきものについての予見で充されているし、なおまた対話において獲得された深まりについての感謝の感情で端的に充されている」(661ページ)のである。そして「対話が結局沈黙に沈みつくしても、それは決して空虚な沈黙ではなく、まさに、「充された沈黙」なのである。(661ページ)

このような真正の充実した沈黙は、「集中的に貫徹せられた対話の後にはじめて現成するもの」(662ページ)なのである。人間は一人孤独でいるときに沈黙するのではない。他の人間と一緒にいる時のみ沈黙し得るのである。しかも対話を通して真実を言い表わそうとする悪戦苦闘の努力の末に、「最早や語られぬもの」(662ページ)を感知して、人間は沈黙するのである。

ボルノーがこの沈黙を中国や日本の水墨画に擬しているのは興味深い。水墨画の白い背景は「そこから色々の形態が束の間のはかなき形象のごとく現われて来る」「ゆるぎなき根底(地)」(663ページ)であり、「決して空虚なものではなく、まぎれもなく真に実在するもの」(663ページ)である。沈黙は、ちょうどこの白い地に対比されるのである。

最後にボルノーは、本書の編者に「敬愛する友人下程君」と呼びかけ、彼の論稿を以下のように結んでいる。「私は(中略)いつ人間の教育的に実り

豊かな理解を得るための研究に終止符を打たねばならぬかは、知るべくもない。しかしいつかはそれを未完のまま跡に残さねばならぬことは、お互いによく分かっている。(中略)我々にはっきりしていることは、我々の仕事もまた沈黙の淵に沈むということである。しかしながらその沈黙は、(中略)我々がその何れも悦びをもたらす対話の後に体感した充実した充ち足りた沈黙なのである」と。学問探求の同じ道において、洋の東西を越えて「偉大な会話」を持ち続けてきた、二人の碩学の魂の響き合いを聞く思いがする。

(北川治男)